

ロスジェネと呼ばれたくない

個人事業主
飯田 文

私の場合

私は1979年生まれで、高校卒業後、大阪外国語大学（現在大阪大学）に進みました。当時、北欧語関係では関東に学校がありませんでした。

そのため敢えて大阪に進学しました。最初の驚きは同級生の狂ったような状況です。それは進学したはいいが、その後の進路（就職）をどうするかについてです。なんでそうなのかを私自身は「ポーツ」と眺めるしかありませんでした。確かに、私と同様の世代に生まれた人々はいろいろな呼び名で呼ばれていました。例えば「氷河期世代」が代表的でしたが。

両親が「競争」を否定する家庭に育ったため、「ポーツ」と眺める状態になったわけです。

しかし、教養学部を終え、3年生になり専門課程に進むとその原因はすぐに理解できました。「実学」を除くと就職戦線は極めて厳しいことを実感せざるを得なかったのです。英米語、ドイツ語、中国語過程に編入する

圧倒的な同級生に驚いたのです。私のようにアンデルセンに憧れ、そのための語学と考えていたこととの隔たりを感じ、私も進むべき自分の進路を再考せざるを得ませんでした。両親の経済的負担を考えると当然でしたが。

私の姉の就職も私を再考させる原因になっていました。大手のゲームソフト会社への正規社員登用（決定済み）が突然変更になり、「契約社員」への契約を承認する場合のみ雇用をするという理不尽な連絡があつてのことでした。姉もそのことのショックから立ち直るのに10数年を必要としました。

転身を決意するまで

語学を専攻されている人には大変申し訳ないのですが、学者になる以外、社会に必要とされる「実学」としての語学は経済に左右されるということを実感せざるを得ませんでした。北欧語については在學生にとって全く興味が示されず、他言語（実学）への編入者が後を絶たない

◆特集 ロスジェネ世代の今は！



照明技師

状態でした。私が生まれ育った環境も経済的に恵まれたものではありません。転身を決意するために「自立」は経済的に「自立」ができることを考えるを得ませんでした。

専攻課程の選択については大いに悩み、自分自身が「自傷行為」に走るのではな

いかと思ひ悩み、母に相談しました。私の状態を心配して、即大阪にやってきました。そこで話し合った結果が今日の私の仕事（経済的基盤）となっています。語学をあきらめた結果について真剣に話し合いが行われたのです。英米語（実学への編入）に関心がなかったわけではありませんでした。中学、高校時代の吹奏楽部の裏方に大変な満足を感じていたので両親にこの気持を伝えました。何よりも私の精神的状態「自傷行為に走るかも知れない状態」を心配した両親は大学を

辞め、すぐにでも自宅へ帰るように勧めたのです。

その後の私は

自宅に戻った私は、以前から自分の適性について考えしてきましたが、「舞台芸術分野」の裏方でした。それが「照明技師」への道になりました。専門学校では好きな道でしたからその後の就職も選び放題でしたので、この道の大手に就職することができました。以前、『月刊まなぶ』に報告しましたが、コロナ禍の始まる一年前に正規雇用から「非正規雇用（個人事業主）」に変更せざるを得ませんでした。周囲を見渡すと、私と同世代の仲間とは私同様に不安定な雇用に思い悩む状況につき当たります。この状態を指して「ロスジェネ世代」と呼ぶのでしょうか、私は素直にうなずけません。なぜならば、この原因を作ったのは政治の怠慢にあると考えるからです。社会の経済的安定に責任を持つのが当たり前であり、どのような経済的原因があっても同世代の人間、働く人々の責任ではないからです。だから私は「ロスジェネレーション」という言葉に抵抗があります。一人の働くものとして、雇用と経済基盤が生活の社会的保障を今後求めていきます。

（いいだ あや）